

奈良文化財研究所『平城宮木簡六』の刊行

平城宮東区朝堂院南面から宮東南隅にかけての地域では、近年ダイナミックな官衙の変遷が明らかになっている。奈良時代後半には、壬生門と朝集殿院南門を結ぶ宮内道路の東西に、式部省・兵部省が対称に配置されたが、奈良時代前半の式部省はその東隣に位置していたことが、官衙内の井戸出土の木簡によって明らかになった。また、式部省の西隣への移転後その跡地には神祇官が建てられたことが、官衙配置や木簡をはじめとする出土文字資料によって解明されている。

本書は『平城宮木簡四』『同五』に続く、第三二次補足調査出土の式部省木簡（平城宮東南隅の南面大垣内側の東西溝出土）の完結編であるとともに、右記のような平城宮東南隅地域の説明に大きく寄与した第一五五次・第二二次・第二七三次調査出土木簡を併せ、計二七八八点の木簡を収録する。

B4判コロタイプ図版一一二丁、A5判別冊解説付き、
特製帙入り、本体価格二五〇〇円

（問い合わせ先）

（株）明新社 TEL 〇七四一一三三一一一

FAX 〇七四一一二六一〇〇九三